

「十六善神図」

香川県では殆ど行われませんが、一般に禅宗寺院ではお正月に『大般若経六百卷』を転読する「大般若会」が行われます。その際に掛けられるのが「十六善神図」です。

中央上部にお釈迦様、左下に普賢菩薩、右下に文殊菩薩が描かれています。右下外側の僧は『般若経典』を伝えた玄奘三蔵法師、左下外側の赤い鬼神は玄奘が沙漠を渡る時に助けた深沙大将です。そしてその周囲を十六善神が取り囲ん



でいます。十六善神の詳細は判っていませんが、『般若経』を守護する神々だとされます。

写真の十六善神図は現任職が晋山した際に頂いたもので、毎年お正月には本堂にお祀りしています。

實相寺  
花園會報

令和六年  
一月一日発行  
発行所  
臨濟宗妙心寺派  
陽明山 實相寺  
實相寺花園会  
〒761-0450  
高松市三谷町  
1811番地1  
TEL087-889-3838  
編集発行人  
山本文匡  
<https://www.jissouji.net>

第177号

お寺の掲示板

中国唐時代の詩人、劉希夷の漢詩「白頭を悲しむ翁に代わる」の中の一節で、大變有名な対句です。

花は季節が巡ってくれば、毎年同じように花を咲かせますが、人は年ごとに変わってしまふ、という世の無常を歌った詩です。

お互いにまた一つ歳を重ねましたが、「人不同」であるからこそ、今を大切にしたいものです。今年も宜しくお願い致します。

年々歳々

花相似たり

歳々年々

人同じからず

劉希夷

「新年偶感」

新年おめでとうございます。令和六年の干支は甲辰です。干支というとは、現代日本では子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二支ばかりが取り上げられますが、本来は、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の十干と十二支の組み合わせだから干支なのです。

十干も十二支も元々は古代中国で考えられたもので、陰陽五行説に基づいています。五行とは木・火・土・金・水の五つですが、それぞれの陽の気を表すのが「え」、陰の気を表すのが「と」です。例えば甲は木の陽、乙は木の陰を表します。また十二支にもそれぞれに五行の

陰陽が割り当てられていて、辰は土の陽にあたります。

さらに干支は年だけでなく月・日・時間や方位も表し、天体観測や吉凶の占いに用いられました。午前12時を正午というのは、午の刻の正中を意味しますし、土用の丑の日は今でも耳にします。

ちなみに住職は昭和39年5月19日生まれですが、その日は旧暦では辰の年の辰の月の辰の日にあたります。残念ながら時間までは辰の刻ではなかったようですが。

それでこの十干と十二支の組み合わせは、甲子から癸亥まで全部で60通りありますので、61年目は最初の組み合わせに戻る訳です。つまりその人が生まれた年と全く

同じ天体の配置になるので、それを「還暦(暦が還る)」と呼んで、昔から生まれ直しをお祝いするようになりました。赤いものを身につけるのは、赤ちゃんに戻る意味があります。最近では誕生日に還暦を祝う方もいるようですが、本来は旧暦の干支に困んだものから元旦から還暦な訳です。

さてそういう訳で住職もおかげさまで還暦を迎えました。現在の日本は平均寿命が男女ともに80歳を越えた長寿社会とはいえ、やはりこれからは宋時代の官吏、朱新仲の人生五計(生計・身計・家計・老計・死計)でいえば、老計(どう歳をとるか)や死計(どう死ぬか)を考える年齢ですし、古代インド

で説かれた四住期(学生期・家住期・林住期・遊行期)でいえば林住期であり、遊行期に向かって学びを深めていく時期でもあると思っています。

住職個人だけでなく、日本社会も人生における青春時代のような、かつての高度成長期は遠くに過ぎ去り、人口減少の今、どう縮小していくかを考えるべき状況であり、それは寺院など仏教界も同様です。こういう状況下で私自身も還暦を迎えられたことにある種の意義を感じています。これからは自身の老いを通じて、成長を指さない生き方、人生の仕舞い方を学んでいきたいと考えています。本年もどうぞ宜しくお願いします。